スウェーデン（Sweden）

北欧のスカンディナヴィア半島の東半分を占める立憲君主国で，森と湖の国として知られる観光地でもある。893.4万人（02）の人口のほとんどはプロテスタント教徒で，言語はスウェーデン語，首都はストックホルム。バルト海域では工業国として知られ，この地域の中心的存在であり，社会福祉と環境保護の国として知られている。古代からスヴェア人が隣接諸国と争っていたが，14世紀の末にマルグレーテ女王はカルマル連合を結成し，デンマークおよびノルウェーを併合した。その後三国は分裂したが，16世紀にグスターヴ一世はルターの教義を迎えいれ，プロテスタント王国として北ヨーロッパ世界に君臨した。北方戦争でロシアに破れ，ナポレオン戦争でフランスに破れたが，グスターヴ国王の体制はその後も続いた。スウェーデンの図書館は，中世期の修道院が16世紀末のプロテスタント教義の導入によって廃止され，蔵書は散逸もしくは破壊されて，新たな出発が始まった。歴代国王は，学術を重視し，大学図書館が次々に設立され，ウプサラ大学はヨーロッパでも最古の大学の一つであった。各地の都市での図書館活動は，地方自治体の教育熱心さに支えられていたものの，ばらばらであり，基準が出来たのは19世紀の初頭，イギリスとアメリカの公共図書館制度が導入されてからであった。とはいえ，1911年には早くもストックホルムに児童図書館が出現していた。1912年には公共図書館のための法が制定され，中央からの支援は各地の公共図書館設立に拍車をかけた。現在ではどんな僻地にも市民のための図書館が行き渡っている。学校図書館は，小学校と高校の二つの方向でそれぞれが発達していった。第二次大戦後には全国システムが各種図書館の間に成立し，見事な協力体制は公共図書館および大学図書館の間に実現しており，さらに，スウェーデンは北欧の図書館間協力体制を支える「スカンディア計画」の中心となっていた。

ストックホルム（Stockholm）

スウェーデンの首都。13世紀半ばに建設され，ハンザ同盟の中心地であったが，クリスチャン二世が即位し，貴族たちを虐殺，彼もグスターヴ一世により権力の座を追われた。その後は海港都市として発展，風光明媚で「北のヴェネツィア」と呼ばれた。人口は73.6万人（00）。

スウェーデン王立図書館（Kungliga Biblioteket, Sveriges Nationalbibliotek）

ストックホルムの王立図書館はヴァーサ王朝の本好きの歴代国王が作り，エーリク十四世の1568年には216冊の私的なコレクションになっていた。次のヨハン三世は城のチャペル外壁に図書廊下をめぐらした。ここが目立った場所となったのは17世紀のグスターヴ二世の時で，国外からの戦利品としての図書コレクションは国内各地の図書館を潤していた。1647年には火事にみまわれるが，1632年より王位についたクリスティーナ女王の時期にはモラヴィアやボヘミアから本が贈呈され，運ばれてきた。女王はフランス哲学の素養を持ち，デカルト等と付き合い，図書館員ノーデを国に呼び寄せた。しかし，1655年にはカトリック教に改宗してスウェーデンを去り，蔵書をローマに持ち去った。続く国王たちは，貴族から本を寄贈させて図書館を再び拡大し，蔵書は2.5万冊となったが，1697年には大火のためほとんどが失われた。18世紀から19世紀にかけ，歴代国王は再度図書館の設立に寄与し，図書館長たちがこれに応じた。19世紀の末よりダールグレン館長により，納本制度を確保し，国立図書館の地位を保った。1978年には王立科学アカデミーと合体して，研究図書館の役割まで担うようになり，全国書誌の刊行と国内図書館総合目録を実現してスウェーデンの図書館の中核となっている。蔵書は400万冊，雑誌が2.2万タイトル，インクナブラを1500冊，地図を25万枚，レコードを44.8万枚，マイクロ資料を23.3万点所蔵している。特殊コレクションにはスウェーデン関係はもとより，ラーゲルクヴィスト，ストリンドベリも集めている。

ウップサーラ大学図書館（Uppsala Universitetsbibliotek）

ウップサーラの大学は，スウェーデン王グスターヴ二世の時代，1620年に創設された。国王はストックホルムの修道院から蔵書を運ばせ，図書館の中核コレクションとした。ここにはグスターヴの子孫や当時の著名な政治家や学者がこの図書館の設立に協力していた。ここをさらに拡大したのは，17世紀におけるスウェーデンの威勢であった。リガの修道院蔵書をはじめとするドイツ各地からの戦利品は図書にも及んでいた。しかし，その後の歴史のなかで，図書館は常に自己の存在理由を問われてきた。ルター派の拠点であるスウェーデンでカトリック関係の資料が増えることの問題，王室図書館が次第に拡大されるのに対する大学図書館の機能，新時代に対処できない旧制度の大学学部であり，その都度，館長は報告書の提出を迫られた。18世紀に入ると，国の文化遺産としての資料が見なおされ，スウェーデン関係コレクションがここの目玉となっていった。20世紀には医学部などの新設の学部，および学内にある16の分館の合理的な経営は，新館の建築とともに今後の重要な方向を定める問題と見なされている。大学の学生数は2.8万名。図書館には約530万冊の図書，1.3万タイトルの雑誌，2700冊のインクナブラ，18万枚の地図，2万点のマイクロ資料があり，写本のなかには6世紀の「銀の聖書」その他がある。特殊コレクションの数も極めて多い。

＊言語はデンマーク語

デンマーク（Denmark）

ヨーロッパ北部，北海に面する立憲君主国で，ユトランド半島とその東方の島々からなり，国土全体が氷河の浸食作用によって出来ており，気候は暖流の影響で温暖，農業・牧畜・酪農に適している。人口は528.7万人（02），＊→言語はスウェーデン語，住民の多くがプロテスタント教徒である。首都はコペンハーゲン。進取の気性のデーン人は「ヴァイキング」となって9世紀から11世紀にはヨーロッパやイギリスに進出した。14世紀には北欧三国のカルマル連合の一国となったが，1523年に独立した。クリスチャン三世は16世紀にプロテスタント教を国の宗教とし，後継の国王たちのもと社会改革が実現した。第一次大戦では中立を守ったが，1940年にはナチス・ドイツの支配下におかれ，国王は幽閉された。戦後の60年代には経済発展を背景に税制を改革し，福祉国家として知られた。デンマークの図書館は12世紀以降にローマ・カトリック教の司祭たちの個人蔵書から始まっていたが，いずれも規模は小さく，1482年に創設されたコペンハーゲン大学とともに実質的な図書館活動が始まった。しかし，1728年の大火は市の大半を焼き払った。18世紀からはコペンハーゲン大学と王立図書館とが競い合って図書館蔵書を伸ばした。18世紀末までには他の学術図書館も実現していた。公共図書館の発達も18世紀にまでさかのぼることが出来，1782年には国内にいくつかの図書館があったが，いずれも宗教書とか農業書にかぎられていた。1860年以後の公共図書館運動は，個人寄付と自治体の支援で多数の図書館を実現させ，以後はアメリカの図書館システムを取りいれることで急速に発展し，図書館協会がこれを背後から支えた。第二次大戦期はナチスの図書館政策に対する抵抗の時期であった。戦後は1946年にデンマーク作家の作品は政府が買い上げて公共図書館に置かれ，1950年には利用料が全廃された。1960年代から1970年代の経済発展により，国民は国内のどの公共図書館からでも本が借りられるようになり，島にも図書館網は広がった。図書館司書の教育はすでに1918年には3か月研修が開始されていたが，1938年より4年のコースが大学で始められ，戦後の1956年にコペンハーゲンの王立図書館学校が設立され，一年の実習を含む4年制の本格的な教育が確立されている。

コペンハーゲン（Copenhagen）

デンマークの首都。12世紀より海上交通の要衝として知られ，19世紀半ばまでオーレ海峡を通過する船から通行税を取っていた。ナポレオン戦争で被害をうけたが，のちに復興。第二次大戦ではドイツ軍に占拠され，港は連合軍の爆撃で破壊されたが，市街地は無事であり，美しい町並みを残している。人口は49.1万人（00）。

コペンハーゲン大学図書館（Københavns Universitet Bibliotek）

大学の開設は1479年，学生数は2.8万名。図書館の蔵書は約120万冊。

デンマーク王立図書館（Konglige Bibliotek）

国王フレデリク五世により1653年に設立された王室の図書館は，1728年に大火で大学図書館（1482年設立）が焼け落ちた際には，蔵書7万冊の国内で最大の図書館となっていた。その後，国内資料の納本と貴族からの購入コレクションで蔵書は豊かになり，1793年には市民に開放された。20世紀に入ると，マルティン・ルター資料やアンデルセン資料を獲得し，図書館は国外でも知られた存在となった。1943年には一時期大学図書館と合併していたが，1980年には旧にもどり，二つは協力しながらそれぞれ発展している。王立図書館の蔵書は，現在487万冊で，インクナブラは4050冊，地図は27万枚で，音楽資料も26.8万点がある。

オーフス国立・大学図書館（Statsbiblioteket Universitetsparken）

1897年，デンマーク議会は，コペンハーゲン以外の国内住民に図書館サービスを提供するための国立図書館をオーフスに創設することを決議した。1902年に国立図書館は蔵書1万冊でスタートし，1928年に設立された新しいオーフス大学はこの図書館に同居することとなった。その後，国立図書館か大学図書館かを巡って議論が続いた。国立図書館は文化省，大学図書館は教育省の管轄だったのである。1963年に大学図書館の新建築が完成すると，国立図書館はここに移動し，二つの機能は合体した。国立図書館は国内の公共図書館の貸し出しコレクションとして，蔵書を三倍，利用を二倍に伸ばしていた。国はこうした状況をさらに発展させるべく法的な措置を次々に打ちだした。1985年に国立図書館は国内公共図書館の貸し出しセンターの機能をはっきりさせ，隣接諸国の図書館からの借り入れも合法化させた。1987年にはラジオ・テレビの番組を提供出来るよう納本規定が広げられた。さらに，1989年には国立図書館に音楽資料の国立博物館が作られ，1995年には総合的な国立メディア文書館に一本化されて，国内への映像・音響資料の手当てが完成している。1990年代は予算削減の時代であったが，国立図書館および大学図書館の利用は驚くほど増加していた。これを受けて，教育省と文化省は共同で1997年にデンマーク電子研究図書館を創設し，未来に向けた新たな図書館の電子化戦略に取り組んでいる。現在の図書館蔵書は約360万冊で，音の資料が60万点，映画ビデオが6.5万点，地図が5.7万枚，マイクロ資料が7.1万点であり，デンマーク諸島関係の資料が豊富。大学の学生数は2.1万名。

ノルウェー（Norway）

スカンディナヴィア半島の西半分を占め，南北に細長く，国土の30%は北極圏に属する。世界最大の漁場を持つ水産国。人口は443.1万人（02），通用語はノルウェー語，宗教はプロテスタント教。首都はオスロー。15世紀より400年にわたりデンマーク人に支配されていたが，バイキングの気性は受け継がれ，民族意識は盛んであった。かつての修道院のコレクションは宗教改革時に破壊されるか，デンマークに運び去られた。1814年に独立し，オスロー大学が1815年に法定納本の権利を持つと，全国書誌の作業に取り組んだ。この大学が国立図書館の役割を担ってきたが，真の意味の国立図書館が待望され，1989年には北部のラナに新しい国立図書館が誕生した。教育熱心なノルウェーでは，公共図書館のレベルは高く，現在は過疎地域への拡大が目標とされている。1987年には国内に465館の公共図書館（蔵書数は1910万冊）があり，学校図書館は3383館（蔵書は650万冊）であった。1960年より国の経済引き締めで図書館を含む文化事業は発展がやや衰えている。

オスロー（Oslo）

ノルウェーの首都，オスロ湾の奥深くに位置する。歴史は古く，1050年ころハーラル三世により設立された。大火の後，1624年にクリスチャン四世により復興，クリスチャニアと名付けられたが，1925年にオスロの名に戻った。第二次大戦時にはドイツ軍により占領されていた。ノルウェー最大の漁港であり海上交通の要衝。造船その他の産業で栄えている。人口は50.3万人（00）。

オスロー大学図書館（Universitetsbiblioteket）

ノルウェーがデンマーク領だった1814年までは，デンマークは市民の反乱を恐れてノルウェーに大学を作らせなかったが，ナポレオン戦争の結果，デンマーク王フレデリク六世がノルウェーをスウェーデンに譲ると，スウェーデン国王の勅許によりオスロー大学が1814年に創設された。ここは1847年までノルウェーの唯一の大学図書館であり，1915年には国内出版物の納本館に指定されたが，1939年には検閲につながるとの理由で廃止された。国立図書館の機能も果しており，図書館は19世紀の末から20世紀にかけて発展し，1914年には新館を建設，1939年には新納本法が可決された。1921年からは『ノルウェー全国書誌（*Norsk Bokfortegnese*）』が刊行されている。戦時期の1940-45年，図書館はドイツ軍に占拠されていたが，図書館は開館し続け，館員はナチスの「望ましくない」本を破壊から守った。1922年より1953年まで館長であったヴィルヘルム・マンテのもと，図書館は国際舞台でも知られる存在となっていた。しかし，1980年代になると，国立図書館と大学図書館の両方の機能を完全に果たすことは無理であるとの考えから，学部の分館を別に増加させた。現在の蔵書は約470万冊，雑誌が3.8万タイトル，地図が13.2万枚，楽譜が20.6万点。学生数は3万7792名で，学内には植物園博物館図書館（5万冊），民俗学博物館図書館（3万冊），地質学博物館図書館（8万冊），ノルウェー遺産博物館図書館（4万冊）その他もある。大学の学生数は3.2万名。

ノルウェー国立図書館（Nasjonalbiblioteket）

歴史的な事情でオスロー大学図書館が「国立図書館」の役割を担ってきたが，第二次大戦後の1980年代になって，研究図書館としての大学とは別に，国家の文化遺産の保存と国民による利用を考え直そうとの動きがはじまった。北極圏にある北ノルウェーのモー・イ・ラナにある「ノルウェー国立図書館ラナ支部」は，1989年に議会の決議で開設された図書館で，ノルウェー刊行物の納本館であり，ここには文献だけでなく，写真・映画・テレビ作品などの映像資料，各種音楽資料もすべて納本され，全国書誌として記録が残されている。ここには保存のためのコピーのほかに，利用のための二部が送付されており，国内の大学図書館の強化のためにも使われている。ここの蔵書は現在約60.5万冊で，雑誌が1万4800タイトル，ほかに視覚資料を21.2万冊，聴覚資料を3.4万点所蔵している。1999年に成立したもう一つの国立図書館は「ノルウェー国立図書館オスロー支部」で，国内出版物の納本を受ける図書館であるが，コレクションはオスローの市民，ノルウェーの国民に利用される。さらに，ノルウェーの文化人・学者の原稿が集められており，国外で出版されるノルウェー関係図書も収集の対象となっている。現在の蔵書は図書が約130万冊，インクナブラは1678冊所蔵し，ほかに雑誌が1.9万タイトル，地図が13.4万枚，楽譜が20万点でレコードが3.8万枚。

フィンランド（Finland）

中世までの図書館は教会および修道院の運営するものが主で，それらは17世紀の宗教戦争の際にほとんどが破壊された。19世紀に入ると，この国はロシアの保護領となり，ロシア総督が支配したが，1820年からはロシア帝国の出版物がすべて納本されるようになった。1827年に首都トゥルクは火災で全滅し，大学図書館等の中世写本はことごとく失われた。19世紀までのスウェーデン語の出版物も同様であった。首都がヘルシンキに移ると，大学図書館の建物は新築され，ここが図書館活動の中心となった。民族詩『カレワラ』が刊行され，図書館は民族意識の拠点となっていた。各都市の公共図書館の成立もこれに拍車をかけた。1917年の独立とともに，各種図書館の設立は活発となり，ロシアの影響は排除された。1921年の図書館法は公共図書館への国家補助を定めており，1928年の改正で，さらなる発展が見こまれた。現在，この国ではスウェーデン語の人口がフィンランド人と同居しており，図書館もそのための資料を抱えている。国土は北緯60度以上にあり，大半が森林と湖で占められており，夏は白夜が多い。森林資源と観光が主たる産業であり，人口は519.4万人（02），言語はフィノ・ウゴル語に属するフィンランド語とスウェーデン語。宗教はルター派のプロテスタントが多い。首都はヘルシンキ。

ヘルシンキ（Helsinki）

フィンランドの首都。フィンランド湾に面する自然の良港で，16世紀半ばにスウェーデンのグスタフ一世により設立され，ロシアのアレクサンドル一世が首都をトゥルクからここに移すと，ヘルシンキ大学が民族運動の拠点となった。新建築やガラス工芸で知られている。人口は55.1万人（01）。

ヘルシンキ大学図書館（Helsingin Yliopiston Kirjasto）

スウェーデン領だったオーボ（現在はフィンランドのトゥルク）の学校図書館を利用して，1640年にヘルシンキ大学の基礎が作られた。ここには1707年よりスウェーデンの出版物が納本されるようになり，図書館蔵書は拡大された。1809年にフィンランドがスウェーデンから独立し，ロシアの公国となると，1820年よりロシアの出版物すべてが納本されるようになった。さらに，ロシアの皇帝からの寄贈や科学アカデミーからの副本の送付は図書館コレクションを増加させた。こうして，この図書館は現在にいたるも19世紀ロシア研究者のメッカとなっている。1902年には地理学者ノルデンの地図コレクションを購入していた。第一次大戦後に独立すると，図書館はフィンランド最大の学術コレクションを実現させ，第二次大戦までは予算難で苦しんだものの，戦後は，アメリカからの支援などで活気を取りもどした。1949年からは全国書誌を編纂・刊行しはじめ，1993年からはそのCD-ROM版を刊行している。別館の書庫は郊外に完成している。法定納本を受け全国書誌を刊行する「国立図書館」の役割を担っているが，別に国立図書館を作る議論は続いており，現在のところは大学図書館がその機能を果している。蔵書は現在約290万冊，雑誌が2.4万タイトル，インクナブラを400冊，地図を25万枚，レコードを20万枚，マイクロ資料を51.6万点所蔵している。コレクションの特徴となっているのは，フィンランド関係，ロシア・スラヴ関係で，作曲家シベリウスの文庫も良く知られている。

中国（Zhongguo）

中国の図書館は，長い歴史のなかでさまざまな変遷を経た。古代の文献が甲骨文や竹簡とか木牘の姿で宮廷や高級官吏の屋敷に集められていたことは知られているが，図書館の管理実態がどのようなものだったかは知られていない。秦の始皇帝は「焚書坑儒」の政策を実施したが，本は隠匿されて保存された。唐代の西安で文人の文化が開花して，石碑に彫りつけられた文献が多数残された。敦煌に保管されていた文献は仏教の聖典に限らなかった。歴代の宋，元，明朝の皇帝は競って宮廷文庫を設立させており，また科挙の試験を目指す学者たちのため，各地の資産家の蔵書楼が作られるようになった。清朝には四庫全書などの叢書が皇帝の命令で編纂されたが，火事や略奪で後には残らなかった。19世紀の半ば，阿片戦争より，中国は西欧列強の侵略に抵抗せねばならず，太平天国などの全国をまきこんだ戦乱は各地の蔵書楼をも破壊していた。20世紀に入り，科挙の制度が無くなるとともに，西欧の型の教育が定着し，アメリカ人メアリー・ウッドは武昌で1910年に市民の図書館と図書館学校を設立した。中華民国の成立は新たな学問の時代の到来を予測させたものの，1930年代末には日本との戦争が始まり，戦後も国内戦のため，1935年には2万か所といわれた地方の読書施設もあらかた破壊されつくした。1949年の中華人民共和国の成立までに，国民党の手で台湾に運び去られた図書も多かった。ようやく新たな時代が到来したものの，1966年からの10年，文化大革命の名のもとに知的活動は徹底して排除され，図書館蔵書は略奪されつくした。1980年代になって，図書館は新たな発展の時代を迎え，北京図書館や上海図書館を始めとする各省の大型図書館が完成し，図書館の機械化にも拍車がかかり，図書館員の養成も武漢大学や北京大学だけでなく，全国各地で展開されるようになった。人口は12億9428万人（02）。

北京市（Beijin）

中華人民共和国の首都で，中国の政治，文化，教育，経済の中心。歴史は極めて古く元朝の時代から首都となってきた。城壁都市であったが，近年の開発で旧市街の面影はなくなった。人口は663.4万人（00）。中国の学術および図書館の拠点。

北京国家図書館（Beijing Guojia Tushuguan）

「中国国家図書館」の正式名称を持つ北京図書館は，清国末期の1909年に宣統帝の認可により成立したが，清国は1911年に崩壊し，図書館は中華民国の教育部の所轄となった。1928年に民国政府が首都を南京に移すと，1933年には南京に国家中央図書館が設立され，北京の図書館は北京国家図書館と名称を変えた。二つの図書館は共存していたが，1949年に中華人民共和国が成立すると，南京の図書館は民国政府とともに台北に移った。1937年に日中戦争が始まると，資料の安泰のため約6万点の絵画，写本，その他がアメリカに送られ，議会図書館に預けられた。このコレクションは1965年に台湾国立図書館に送り返された。戦争の間，北京国家図書館は重慶に本拠を移していたが，1945年の終戦とともに北京に戻った。その後の資料増加はめざましく，1949年当時140万冊だった蔵書は，1979年には900万冊となっていた。1979年にはアメリカとの国交も回復し，その後は外国資料の増加も加わった。1975年，周恩来首相はすでに図書館新館の建設を決めていたが，北京北郊は白石橋，紫竹苑の隣接地に壮大な建物が出現したのは1983年であった。新館には3000の閲覧席があり，毎日平均7000人の利用者がある。中国図書館協会もここに事務局を設けており，出版社も付設されている。図書館は1998年に中国国家図書館の名称を持つことになった。蔵書は現在約2000万点で，マイクロ資料を100万点所蔵している。コレクションの内容は中国随一で，亀甲資料が3万5651点，拓本が7.8万セット，古地図が6万枚，地誌が6000冊，敦煌資料が5万点，ほかに，近代中国の新聞・雑誌，辛亥革命から五四運動にかけての歴史資料その他を持っている。目録の機械化には1970年代から取り組み，1988年には中国マークを開発，現在は国内の全文デジタル化計画の中心となっている。

台湾（Taiwan）

太平洋上の島で，台湾海峡を隔てて中国本土の対面に位置しており，7世紀には福建省や広東省からの中国人が移住していた。16世紀の末にポルトガル人はここを「フォルモサ」と名付けた。その後，オランダとスペインの部分的な領有となり，明朝末期は中国人が島を征服，先住民は奥地に追いやられた。1895年の日清戦争の結果，台湾は日本の統治下に置かれ，日本の敗戦とともに1945年に独立したが，中国本土での内戦の結果，蒋介石の国民党政府は台湾に移った。その後の台湾はアメリカとの不可侵条約に守られ，国内の繁栄に力を注いだ。人口は2345万人（01）で，公用語は中国語。文字は昔からの字体を使用している。教育程度は高い。台湾での図書館の普及は，日本統治下の台北に総督府図書館はあったものの，1949年の国民党の移転以後に始まっていた。特に1965年以降の発展は目ざましかった。大学は急速にその数を増し，いっきょに100校を越えた。公共図書館も都市のみならず，農村にまで設立され，山間の僻地を除いてほぼ普及している。学校図書館はさらに大きな展開を見せ，初等・中等学校にはほぼ普及し終わっている。大学図書館はコンピュータ・ネットワークによる協力体制を実現している。図書館協会はこうした状況のもとで国の図書館自体を背後から支えている。

台北（Taipei）

台湾の首都，台湾島の北部にある最大の都市。1895年から日本の統治下にあり，1945年に解放，1949年には国民党政府が大陸から移ってきて，ここを首都とした。人口は264，1万人（02）。

台湾国立中央図書館（National Central Library）

中華民国（台湾）の国立中央図書館は，国民党の中華民国政府が樹立された南京で1933年に設立され，北京の教育部にあった清代の書籍4.6万冊が出発時の蔵書であった。1937年までに蔵書は18万冊になっていたが，中日戦争で，図書館は重慶に疎開し，コレクションの一部は重慶郊外の白沙に移された。戦争の間，館長は日本軍占領下の上海，広州で中国の蔵書家が手放した本を引きとる交渉を続けていた。1949年に国民党政府が台湾に移ると，図書館は台北に移転し，植物園内の敷地に落ちついた。アメリカ議会図書館は戦時期に預かった3万冊の漢籍を返却してくれた。1986年には新館が完成した。蔵書は現在255.5万冊，うち中国語が93万冊，ヨーロッパ語が44万冊，日本語その他が14万冊。漢代の竹簡が30点，石刻が14万点，地図が1.2万枚，マイクロ資料を64.4万点所蔵しており，宋版以後の古代からの貴重な印刷文化を網羅している。館内には中国研究所があって，国内外の研究者に研究施設を提供し，定期的なセミナーが開かれている。